

# 郷土かるたの全国的動向

—その社会科教育論的考察—

原 口 美 貴 子

群馬大学大学院教育学研究科

山 口 幸 男

群馬大学教育学部社会科教育講座

(平成6年9月9日受理)

## A Study on the Local Card (Kyodo Karuta), one of the Japanese Syllabary Cards, from a Viewpoint of Social Studies Education

Mikiko HARAGUCHI

Yukio YAMAGUCHI

1994. 9. 9

### summary

Japanese People have played Japanese Cards Game “Karuta” as a Winter indoor Game from olden times. Both “The Cards of a Hundred Poems by one Hundred Poets” and “Japanese syllabary Cards” are popular Karuta Games.

Within the Local Cards “Kyodo Karuta” one of the Japanese syllabary Cards, a lot of Physical, Geographical, Historical and Social Basic Knowledge in the Local Area are included, therefore Children can memorize the Basic Knowledge pleasantly and unconsciously in playing the Kyodo Karuta game.

We have collected Kyodo Karutas from all Parts of the Country, and have studied them from a Viewpoint of Social Studies Education.

### 1 はじめに

「百人一首歌かるた」や「いろはかるた」といったら、誰しもがどこかで遊んだり、または句だけでも耳にしたりした経験を持っているだろう。「かるた」は日本固有の文化の一つであり、遊びながらにして、その歌句や織り込まれた事物についての知識を記憶に馴染ませることができるといふ教育的性格を本来持ち合わせている。この「かるた」のジャンルの一つに「郷土かるた」と呼

ばれるものがある。「郷土かるた」とは、郷土を代表するような様々な事項（自然・歴史・文化・産業など）を織り込んだ「いろはかるた」の一種である。そのため、児童・生徒はかるた遊びを通して、知らず知らずのうちに郷土について認識（知識面・情意面を含む）していくようになるが、このことは郷土認識を重要な教育目標の一つとしている社会科教育にとって注目に値するものといえる。

今日の学校教育においても「かるた」を取り入れた事例はみられるが、<sup>1)</sup>「郷土かるた」が郷土認識の形成に及ぼす影響について本格的に研究したものは従来存在しなかった。この視点に立つて、筆者らは今までに、戦後における「郷土かるた」の先駆的、模範的、代表的存在である群馬県の「上毛かるた」を例に、「郷土かるた」が児童・生徒の郷土認識の形成に及ぼす影響について、<sup>2)</sup>実態調査をもとに実証的に明らかにしてきた。

筆者らはその後、戦前及び戦後に全国各地で製作された「郷土かるた」について、その存在や製作の目的、活用例などの調査を進めた。本稿は、この調査結果をもとに、従来全く不明であった戦前及び戦後における「郷土かるた」の全国的動向を、社会科教育の視点から考察しようとするものである。

## 2 かるたの歴史と郷土かるた

### (1) かるたの歴史

一言にかるたといっても、その形式や内容は作り手や時代背景によって多種多様である。そこで、「郷土かるた」がどのような経緯を経て生まれてきたのか、それにより「郷土かるた」はどのような性格を持っているのかを知るために、日本におけるかるたの歴史を<sup>3)</sup>探してみたい。

かるたの系譜をさかのぼると「歌かるた」にたどりつき、それをさらにさかのぼると、平安時代中期あるいは末期頃からの貴族の優雅な遊び「貝覆」にまでたどりつく。当時、貝を用いた貴族の遊びとして良く知られているものには、「貝覆」のほかに「貝合せ」があるが、この両者は遊び方が別である。

「貝覆」は三百六十五対（他説もある）の蛤貝のそれぞれ一対を左右に分けて貝桶に入れ、一方の貝桶の中に入っている蛤貝の半片を、中央に空間を残して同心円状に並べて場に出す。これを地貝というが、これとは別にもう一方の貝桶から出してきた半片である出貝を一枚中央の空間に置き、地貝を探し出して出貝を覆う。その時、まず貝の表の地紋を合わせ、次にぴったり一対になるかどうかを確認する。蛤貝の一対が、その一対以外のどんな半片をもってしてもぴったり合うことはないという特性をうまく取り入れた遊戯といえる。この場合、より多くの対をつくった側が勝者となるが、いつの頃からか勝者には賭物が与えられ、敗者は後日勝者を饗応するという習わしも生まれていったらしい。ちなみに蛤貝は貞節のシンボルとされていたことから、公家風の嫁入りの際には、貝桶をその行列のまっさきに運んで、婚家に進み入るのを嘉例としていたようである（『嫁入記』）。

それに対して「貝合せ」は平安時代に貴族の間で広く一般的に行われていた物合せの一種である。物合せとは、草花、生きもの、絵画など、ある一つのテーマを決めて持ち寄り、それらを左右に対置させて優劣を比べる遊びである。最終的には勝敗をつけるが、勝敗という側面のみならず、二つの対置されたものを比較し合う中で、それぞれを心ゆくまで味わい、楽しみつくすという側面も持ちあわせた趣深い遊びである。これら種々の物合せには、持ち寄ったものを主題とした和歌を添えるのが通常であり、珍しい貝を持ち寄って競い合う「貝合せ」においても例外ではなかった。

このように「貝覆」、「貝合せ」とも、平安貴族によって愛好され流行していた遊びであるが、その後武家の時代になると、歌が苦手な武士たちによって「貝合せ」よりも「貝覆」の方が受け入れられ、人気の主流となっていった。武士たちが「貝覆」に興じる様子は『源平盛衰記』等各種の文献に登場しており、室町時代になると、禁裡では、男は楊弓、女子は「貝覆」というようになりかなり頻繁に行われていたものらしい。

「貝覆」が上流階級によって継承されていくうち、貝殻そのものも次第に洗練され、工夫されるようになってくる。室町時代になると、貝殻の内側に裂きずや紋などの装飾を施した「絵貝」と呼ばれる貝が用いられるようになったり、さらに時代が進み、技芸も進むと、一对の貝殻に詩歌、例えば『古今集』恋の歌の上の句・下の句などを、片方ずつわけて書いた「歌貝」が用いられるようになった。この「歌貝」は古歌をおぼえる練習に使用されていたと推測される。

16世紀半ば頃になると、南蛮貿易により、ポルトガルやスペインの商人から多くの文物が持ち込まれるようになるが、その1つにポルトガル（南蛮）カルタがあった。これが日本古来の「貝覆」遊びから発展した「歌貝」に大きな影響を与えることになる。

カルタという言葉はポルトガル語もしくはスペイン語のcarta（カード・手紙・証文証書・地図などの意味）に由来している。ヨーロッパにおけるカルタの源流は、ジブシーが占いに用いたタロットとされ、もともとは12世紀前後に中国で作られたカードが13世紀頃ヨーロッパに伝わったものと考えられている。タロットには絵札の大アルカナと文字（数）の小アルカナの二種があり、そのうちの小アルカナが、日本にもたらされた南蛮カルタの原型となっている。

南蛮カルタはたちまち日本国内で流行し、やがてそのイミテーションともいえるべき国産初のカルタ、「天正カルタ」を生み出させた。現存する最古のものとしては、筑後の三池の住人貞次が作った札がある（兵庫県芦屋市滴翠美術館蔵）。もともと異国文化に好意的だった大名のいる土地柄であったこと、活版印刷機による印刷技術を持っていたこと、良質の和紙を作れるこうぞの産地であったこと等の要因が重なって、三池の地で大量生産されていったということになる。しかし、南蛮カルタ自体賭博性が色濃かったため、その系統の下に作られた「天正カルタ」、それに続く「ウンスンカルタ」「スンスンカルタ」、さらに賭博要素のみを残した作られた「めくり札」「カブ札」などは、以後しばしば時の権力者らからの禁止令を受けることとなる。この系譜のものを「賭博カルタ」といい、その流れを受け継いだ花札は、厳しい取締の目を逃れるために、賭博カルタに

つきものの数標を表に出さず、12か月にちなんだ花鳥風月を配し、風雅な歌まで添えることによってカモフラージュを狙った日本人の苦肉の作であろう。

上記からわかるように、「歌貝」と「南蛮カルタ」はシステムの上では何の関係もないが、「南蛮カルタ」が「歌貝」に与えた最も大きな影響は、そのカード式遊戯の便利さであった。すなわち「歌貝」に使われた従来の貝殻は、木札となり、さらにカード化され、その名称も「歌かるた」と呼ばれるようになっていった。この「歌かるた」は「歌貝」の性格を引き継いでいるので、古典的な詩歌をおぼえさせる“教養のためのもの、”であり、同じ「かるた」という発音を持つてはいるものの、「賭博カルタ」とは全く異質な性格であることが明らかである。このことは「歌かるた」については“かるたをとる、”といい、「賭博カルタ」については“カルタをうつ、”というふう言葉を使い分けていることから理解できる。

さて、現存する最も古い「歌かるた」として、今日でも有名なものに「小倉百人一首歌かるた」があるが、鎌倉時代に藤原定家によって成立した「小倉百人一首」は、「天正カルタ」等の流行をみたこの時期になって初めてかるたの形式をとり、教養に、そして遊戯にと使われるようになったと考えられている。また、かるたの材質も紙だけでなく絹地を用いたり、形も長方形や将棋駒形が作られたりと多様化していった。「百人一首」の他にかるた化された文学作品としては「伊勢物語」、「古今集」、「源氏物語」などがあるが、このうち「小倉百人一首歌かるた」だけが後に庶民の家庭でも遊ばれるようになり、正月の遊びとして定着していった。

江戸時代初期になると、詩歌だけではなく、動・植物、虫類、貝類などの博物学的知識や、歴史・地理的知識、器物、宮廷の調度品、武具、職業などの社会知識等、事物を教え、視覚的にうったえるかるたも誕生する。このかるたは、同種の絵を描いた一対や、一方が絵で片方が文字といった形式をとっていることから、「絵合せかるた」と呼ばれている。これらは深窓に育ち世情にうとい子女たちの実物教育のかわりを果たしたものと考えられる。そして、18世紀初め頃になると、庶民の間で、生活の知恵の結晶ともいうべきことわざを集めた「ことわざかるた」が作られ、かるた文化は上流階級だけでなく、一般庶民の間にまでひろく浸透していった。この「ことわざかるた」が改良されて、「いろはたとえ(諺)かるた」(いろはかるた)となる。わが国には、古く(平安時代)から「いろはうた」があり、いろは冠置文芸なるものが成立していたが、この「いろは」をことわざかるたの頭文字として使用したのである。その代表的なものが「犬棒かるた」であり、江戸の庶民に爆発的な人気を呼び、様々なパロディーが生み出されていった。これらの「いろはかるた」は、和歌(詩歌)の入ったかるたのように、上流人の趣味性を盛り込んで作成、保存されたものではなく、庶民の生活の知恵や生活感情をたとえに託して作られたもので、庶民の遊戯具として消耗品の運命を余儀無くされたため現存品が少ない。しかし、これをきっかけに「いろはかるた」作りの興味を刺激された人々の手によって、実に多種多様の作品が作り出されることになった。その一種が「郷土かるた」ということになる。

以上のように、「貝覆」「歌貝」を源流とし、「歌かるた」「いろはかるた」というかるたの流れ

を受け継いで生まれた「郷土かるた」は、その性格として、遊戯的価値のみならず教育的価値を持ち合せていることが確認されよう。

なお、今日使用されているトランプは、タロットの小アルカナの紋標が、ヨーロッパ各国の歴史のなかで改良されたものであり、そのうちのフランス式紋標のトランプが、明治以降になって日本に新たにもたらされた。すなわち日本にやってきた舶来カルタは、南蛮貿易時代のポルトガルカルタと明治時代のトランプと二種あることになる。

## (2) 郷土かるたの定義

戸板康二氏は、郷土かるたを「地理の教材にもなりそうな、特定の県・市町村でこしらえて、その土地の書店にだけに売っているかるた」としている。これは、定義というよりも、郷土かるたの持つ基本的性格の一端を指摘したものである。また、半澤敏郎氏は、<sup>5)</sup>「郷土カルタは名称が示すように、郷土にちなんだ名所及び旧跡、文化財、郷土の偉人、郷土産業といった、歴史的、地理的内容構成によって創作したカルタ」と定義しているが、本稿では「郷土かるた」の条件として次のものを考えたい。

第一に、郷土の範囲は都道府県程度ないし市町村程度の範囲とする。(ただし、市町村より狭い範囲、たとえば学区程度でもよい)。したがって、日本地理かるた、日本歴史かるたなど日本全国を対象とするものは郷土かるたには含まない。また都道府県を大幅に越える範囲を対象とするものは一応除外する(数都道府県にまたがっていたり、各地方を対象とするかるたについてはその存在を認めるにしても、郷土かるたと呼ぶかどうかは現在検討中である)。

第二に、取り上げる題材は、その郷土を代表し、かつ様々な内容(自然・歴史・産業・文化・地名など)にわたるものとする。特定の事項だけ(たとえば、植物だけ、人物だけ)を取り上げているのでは不十分である。

第三に、「いろはかるた」であること(ただし、「あいうえおかるた」もいろはかるたの一種とみなす)。

これらの条件を踏まえて、「郷土かるた」とは、郷土を代表する様々な事項が読み込まれている「いろはかるた」の一種である」と筆者らは定義したい。

ところで、上記ではカタカナの「カルタ」、ひらがらの「かるた」の両方の用語を使用してきたが、かるたの歴史をみてきたように、両者は本質的に性格が異なっている。すなわち、カタカナの「カルタ」はヨーロッパ伝来のもので賭博的性格を持っており、ひらがらの「かるた」は日本古来に源流があり教育的性格をも持っている。そこで両者を区別するために、意図的に二つの用語を使用してきたのであるが、今後もこの表現を用いていくことにする。ただし、固有名詞として存在するかるたの名称はそのままの表現を用いたので御了承願いたい。

### 3 戦前の郷土かるた

「郷土かるた」につながるかるたのルーツは上述の通りである。では、「郷土かるた」は、具体的にいつ頃から作られるようになったのだろうか。これについては資料も少なくはっきりしたことはわからないが、管見の限りで確認できた古いものとしては、上灘小「郷土かるた」、「松本郷土かるた」、「橘陰郷土かるた」など合計八種ある。これらの製作時期は、主として昭和初期における郷土教育期にあたっている。当時、世界恐慌の余波を受けて、全国の農村経済は荒廃状態にあった。生活の基礎単位である農村を復興・発展していくための望みが教育に求められ、全国で各種の郷土（農村）教育の試みがなされたのがこの時期である。

この郷土教育期の中で、郷土かるたはどの位置付けられていたのであろうか。東京帝国大学教育学研究室が、昭和6年12月8日～7年1月15日に行った郷土教育に関するアンケート調査の質問紙をみると<sup>6)</sup>、郷土の施設に関する項目の一つに、「郷土かるた」の項目が用意されていることから、既に当時の学校教育の中で、「郷土かるた」の教育的意義は注目され、郷土教育の一段として一般的に位置付けられていた様子がわかる。この調査は全国443の学校に対して行われ、回収校数は57校、うち「郷土かるた」を使用している学校は4校であった。この4校ともかるたの実際の使用は昭和5年以降である。同研究室は「郷土かるた」製作の趣旨を、「郷土の自然文化諸般のことを「いろはかるた」などに作って、これを雨天の際の教室遊戯や家庭遊戯として用い、遊戯の間に郷土に関する事柄を知らしめること、としている。

昭和初期の郷土教育期以外にも、戦前において「郷土かるた」が製作されたことはあったかもしれないが、消耗品という特質上、現存しているものの少なさが難点である。しかし文献や聞き取り調査などによって今後調査を進め、「郷土かるた」の掘り起こしをしていきたいと思っている。では、八種の「郷土かるた」について、それぞれ年代順に紹介していこう。

まず関東大震災（大正12年）の前に、横浜で製作された「横浜歴史イロハカルタ」であるが、近年になって横浜開港資料館が個人から寄贈された原版をもとに復刻版を作っている。その復刻版に添付されている説明書によると、原版の製作者はある子供新聞社で、正月用の付録として読者に配布したものとなっている。「横浜歴史イロハカルタ」は、全48枚の札に横浜の歴史や各所旧跡が織り込まれており、大震災前の横浜の姿を彷彿させる貴重な資料ともいえる。

鳥取県上灘村（現倉吉市内）の「郷土かるた」（第1表）は、昭和3年に当時の上灘小学校校長であった峰地光重氏によって製作されたものである。彼の志向していた郷土教育とは、児童が郷土の実態を科学的に調査し、郷土の現状を正しく認識することによって、郷土を発展に導く力を養うことであった。この論にたって峰地は、学校を小郷土社会と位置付け、校内に倉吉町農会をおいたり、教師と児童が一緒になって玩具等の生産、販売をしたり、児童の製作した「子どもニュース」を発行したりと、種々の実践を精力的に行っていた。その実践の一つに「郷土かるた」の製作がある。峰地は「郷土かるた」の製作・活用に対して次のように述べている。

第1表 上灘村の「郷土かるた」の読札 峰地光重作(昭和3年)

い	いけすの鯉は田中の名物	ゐ	居眠り地蔵さん米田道
ろ	六根浄めて伽藍橋	の	のろのろ走る倉吉線
は	波止まで流した昔の洪水	お	おいしい鮎は竹田川
に	西は大山伯耆富士	く	くるくる廻って田中の村道
ほ	螢は田中のたんぼ道	や	休まず廻る田中の水車
へ	へんに長いのが倉吉の地図	ま	増してく一方倉吉の人口
と	鳥なきかはす三明寺山	け	煙でくすめる駒姫の墓
ち	力で押し出せ力の上灘	ふ	古い寺駄経寺小林寺
り	力んで立てろよ坊主山	こ	ころんで落ちた辨慶岩
ぬ	抜いた刀で里見は切腹	え	圓谷ぼうきの足跡さん
る	流罪にされたいとしい亀姫	て	寺は山名寺下駄履き門
を	温泉湧き出た昔の湯原	あ	あれは山名の城の跡
わ	我等の学校我等の郷土	さ	賽の神様山の上
か	勝宿禰様は洪水の神	き	金の雞隈廻
よ	寄り来る鮭は田内堰	ゆ	夢見るやうな月夜の土手道
た	田内岩禰陀金岡の筆	め	目の前に見える打吹の山
れ	煉瓦の建物紡績会社	み	見日千軒あつた跡
そ	それは大雅の屏風の絵	し	知らぬものない向山古墳
つ	強いお角力大六さん	ゑ	会下谷平家の住んだ谷
ね	ねがひかなへる乳守の神	ひ	ひろい田圃に下田中
な	梨は二十世紀日本一	も	桃でうづまる駄経寺の山
ら	らんかんのない三明寺橋	せ	せきれい飛びたつ田内の河原
む	昔この地は灘の郷	す	すくすく立つてく工場の烟突
う	うらの小鴨川河鹿が鳴くよ	京	京都へ上る山陰線

……(郷土かるたは)低学年高学年を通じて、興味の中に使用し、郷土の種々なる形態を、極めて手軽く取得させるために、格好のものである。私は尋三の児童と二時間ばかり費やして次のようなものを作った。(略)昭和三年に作製して、冬期間室内遊戯の盛んな時期に教室においたり、又家庭に廻したりして盛にとらせたのである。一二年程度の子供でも冬の間<sup>7)</sup>にすっかりかるたの文句を記憶してしまった。……

……私は児童向きの「郷土かるた」を作り、(略)教授に利用している。小学地理は尋五になってから、初めることになっているけれども、かうした形のもので取り扱っていくなれば、尋一<sup>8)</sup>二の頃から、既に地理に親しませることが出来る。……

この峰地の上灘小「郷土かるた」は、平成元年に彼の当時の教え子たちの企画により、上灘地区振興協議会から複製版が出され、現在各小学校や家庭で使用されているということである。ただし、絵札と解説文については峰地の頃のものではなく、平成元年に新たに作られたものである。また、「郷土かるた」のジャンルといえるかどうか検討中であるが、峰地は因幡と伯耆の二地方について読んだ「因伯地理かるた」も製作していた。

宮城県名取郡中田尋常小学校の「郷土かるた」は、昭和6年に当時の校長斎藤富氏のもとで製

第2表 「橘陰郷土かるた」の読札 今井善一郎作（昭和8年）

い 泉湧玉 瀧の宮	み 田舎なれども お江戸村
ろ 露西垂を征めに 百五十勇士	の 烽火を上る 箱田城
は 八崎 千手観世音	お 鬼が島 鬼征伐
に 西に銀龍 刀根の水	く 苦楽の種は 孫左衛門
ほ 法神流に 三田三吉	や 山守は 森郷右衛門
へ 塀に月影 雙玄寺	ま 満蔵院は 修験道
と 豊城入彦 赤城明神	け 見真大師の 硯石
ち 貯水池に 榛名さかさま	ふ 舟渡に鐵橋 大正橋
り 蓼園ありて 風流あり	こ 小室に子安 別所観音
ぬ 主は憲景 發崎の館	え 英霊殿に 傘の松
る 瑠璃殿作る 定名主	て 天龍渡れば 横野村
を 男、謙信 越後坂	あ 愛宕山には 十輪寺
わ 我等が 肉弾一勇士	さ サージタンクは 銀の塔
か 神楽囃は 南室から	き ギッコンバットン 天徳寺
よ 夜明けの鐘は 桂昌寺	ゆ 夢には非ず 自力更生
た 大区は 根井彌七郎	め 名物第一 利根の鮎
れ 鈴嶽山 玉泉院	み 三河守は 眞壁の壘
そ 空は 赤城の旭やけ	し シッカリ番る 御堰方
つ 塚田塚原 眞壁郷	ゑ 酔って木曾川 うたう都々
ね 猫描き坊主 正善寺	ひ 姫を偲んで 橘山
な 何でも御座らぬ 「只箱田」	も 室は豎穴 蝦夷の跡
ら 落花散りしく 花の明神	せ 清六新道 大トンネル
む 昔の学校 玉匣	す 水泉泉城 寺のあと
う 馬は 拜志の御牧から	

9) 作されたものである。中田村は当時、仙台市向けの野菜を生産する農村として有名であった。しかし一般農村のような落ち着きが失われつつあることへの危惧から、郷土教育の必要性が唱えられていった。その結果作られたのが「郷土かるた」であった。このかるたの取り札（絵札）の裏には解説文が付してあり、戦前に作られた「郷土かるた」の中では特徴的である。実際の利用は、特に修身、読方、地理などの各教科においてなされていたということである。

「橘陰郷土かるた」（第2表）は、昭和8年に群馬県北橘村の今井善一郎氏によって製作されたものである。その後昭和12年に今井は、かるたの解説書ともいべき「橘陰郷土読本」<sup>10)</sup>を編んでいる。この「橘陰郷土かるた」および「橘陰郷土読本」は昭和60年に北橘村教育委員会によって復刻されているが、その中で今井は自作のかるたの内容について、「学問的に不充分であり、しかも大東亜戦争を美化していた傾向が強かったので、復刻にあたっては躊躇しているが、今はこれらを通して本当の戦争の恐ろしさを子供たちに伝えたい、というような感想を述べている。

「松本郷土かるた」（第3表）は、昭和9年に長野県の開智学校の教師が当時設置されていた郷土科の副教材として製作したものである。<sup>11)</sup>松本のお話や名所、年中行事、人物などが五七五調の短い語句で読み込んであり、読み札が字札、取り札が絵札となっている。開智学校は学制が発布

第3表 「松本郷土かるた」の読札 開智学校作（昭和9年）

い	今は夢 井川古城に わく清水	る	井戸は源智 名所図会にも のっている
ろ	六九には 馬屋と蔵と 役所あと	の	登りつめ パツと開けた 王が鼻
は	初春の 夜空をこがす 三九郎	お	送る塩 世々につたえて 飴の市
に	新村の 物ぐさ太郎 屋敷あと	く	国思い 家をも捨てて 茂左エ門
ほ	ぼたるとび 盆ぼん唄で 夕涼み	や	山辺谷 兎川寺おくに 徳運寺
へ	平安の 捧の荘の あとどころ	ま	松本寺 異郷にたてた 七郎兵衛
と	戸田の廟 埋橋の森 丹波塚	け	煙なびく 浅間の宮の 秋まつり
ち	筑摩県庁 あとに松本 裁判所	ふ	福島將軍 単騎シベリヤ 横断す
り	りんご園 今井や笹賀 神林	こ	香ゆらぐ 水野の廟所 玄向寺
ぬ	ぬかれても わっしょわっしょの 青山様	え	絵かきでは 盤谷・五清 また孤月
る	るり色の空 地には黄金の 稲の波	て	天冠や 勾玉もでる 古墳あと
を	小笠原 秀政の墓 広沢寺	あ	浅間の湯 山辺もともに 筑摩の湯
わ	若葉して 春の祭りの 岡の宮	さ	三の宮 千鹿頭の宮 おん柱
か	鎌田から 深志天神 宮村へ	き	近代の 教育進めた 辻新次
よ	世を正す 貞享騒動 多田加助	ゆ	ゆるやかな 埴原牧は 勅旨牧
た	田の川の 田川にお多賀 大明神	め	明治から 高樓高し 開智校
れ	歴代の 城主七回 松本城	み	皆つどう 花の城山 天保より
そ	空高く 満月のぼる 袴腰	し	島内の 鳥居火やみに 赤々と
つ	着く船の 泊りは女鳥羽 一の橋	ゑ	餌差町 鷹匠町など 名は残る
ね	念来寺 あとに鐘楼 だけのこる	ひ	人々の 権利もとめて 奨匠社
な	名も高い 勇士の開基 正行寺	も	森深く しずまる筑摩の 八幡宮
ら	ラッパひびく 連隊のあと 信大に	せ	世界一 岡谷についだ 生糸の町
む	村ひらく 用水堰や 条里あと	す	澄みわたる 空に乗鞍 槍が岳
う	牛伏の 寺には古い 仏たち	京	京に似た 地形信濃の 国府あと

された翌年の、明治6年5月に松本藩学を受け継いで開校され、明治時代を通じて今の幼稚園、中学校、高校、大学、博物館、図書館などの教育施設を併設しており、信州教育発祥の母胎・拠点となっていた。郷土科は明治39年から尋常4年の課程におかれ、教師が編纂した『郷土誌』、昭和7年からは『郷土学習帳』という自主教科書を使用し、実地授業に重きを置いた活発な教育活動を展開していたようである。そのなかで製作されたとみられる「松本郷土かるた」の現物は、現在教育資料館となっている開智学校に所蔵されている。また、「松本郷土かるた」をもとにして、昭和52年に社会法人松本青年会議所が改訂新版の「松本かるた」を製作した。<sup>12)</sup>なお、戸板康二氏は「松本郷土かるた」の製作年を明治の中・後期頃と推測したが、そうではなく昭和9年であることが今回はっきりした。

「高野山郷土いろはかるた」は、昭和9年に弘法大師御入定四百年を記念して作成されたものである。子どもたちの郷土学習用というよりも、真言宗の宗徒向けに作られたものと推測されるが、かるた自体が絵葉書として使用できるようになっているところがユニークで、参詣時の格好の土産として需要があったのではないかと想像される。

新潟県柏崎市の「郷土いろはかるた」は、昭和10年頃、市内高浜小学校の教員によって製作さ

れたものである。製作の経緯等ははっきりしていないが、第二次世界大戦頃まで愛用されていたようである。

富山県の「越中郷土童謡かるた」は、昭和11年に越中郷土研究社によって製作されたものである。読み札の選考は富山高校の教授が行い、童謡調にまとめてある。また、取り札（絵札）のうらに解説文が付されている。このかるたは、昭和55年に地方紙である葉日新聞紙上で紹介された。

以上戦前における八つの郷土かるたについて紹介してきたが、その傾向をまとめると以下のようになる。

①昭和初期の郷土教育期において、学校などでは「郷土かるた」を教材、教具として用いていた。このことは、当時かるた遊びが児童にとって身近であったゆえに、かるた遊びの延長線上に自然に郷土学習を展開することができるといった郷土かるたの持つ教育的価値を、当時の教育界が少なからず評価していたという事実を示すものであろう。

②都道府県を対象とする「郷土かるた」は、富山県の「越中郷土童謡かるた」のみであり、あとの多くは市町村程度を対象とするものである。その理由としては、郷土かるた製作の目的が、児童をして彼らの直接生活経験領域である農村（郷土）を復興、発展させていくことにあったからではないかと考えられる。

③読み札の語調は、「越中郷土童謡かるた」、「松本郷土かるた」を除けばすべて七五調になっている。これは「郷土かるた」が「いろは（ことわざ）かるた」のスタイルを踏襲して製作されたものであるからと考えられる。七五調の特色はことわざがそうであるように、ある事象の本質を鋭くまとめているため、すっきりと簡潔で耳に記憶によく残ることや、長短のリズムが呼吸と良く馴染み、口ずさみやすいことなどがあると思われる。

ともあれ、これら戦前に製作された「郷土かるた」は、戦後に作られた「郷土かるた」に先立つ大変貴重な資料であり、また、「郷土かるた」づくりの下地ともいえるべき郷土研究が各地で行われていたということを示唆させる点でも注目できるだろう。

#### 4 全国各地における郷土かるたの展開

戦前における「郷土かるた」作りの熱は戦後にも受け継がれ、全国で数多くの「郷土かるた」が製作され、今日に続いている。ここでは都道府県を対象とした「郷土かるた」を中心として、戦後における「郷土かるた」の成立と、かるた活動の具体的な内容を紹介・解説することにより、「郷土かるた」の全国的動向を明らかにしていきたい。

##### （1）戦後における郷土かるたの成立

戦後に作られた「郷土かるた」のうち、都道府県を対象とするものの現況についてみると、筆者らのアンケート調査（平成2年と平成5年）により、その存在が確認されたのは、宮城・群馬・鹿児島など18県で、その後の聞き取り調査の結果、現時点では合計21県23種の「郷土かるた」を

第4表 戦前・戦後の郷土かるたの動向 (Tは大正, Sは昭和, Hは平成の略。解説文・地図欄の○印は解説文・地図があることを示す。)

戦 前								
名 称	製作年	製 作 者	主 旨	読 み 札	絵 札	解説文	地図	そ の 他
横浜歴史イロハカルタ 〔神奈川県横浜市〕		関東大震災(T12)の前 某子供新聞社	正月月の付録として読者に配布	七五調				近年現物が横浜開港資料館に寄贈され、複製が作られる。
(上灘小) 郷土かるた 〔鳥取県上灘村〕(現倉吉市)	S 3	峰地光重	低学年高学年を通じて、興味の中に使用し、郷土の種々なる形態を、極めて手軽に取得させるために格好	七五調 製作者と教え子の作				H1に複製される
(中田小) 郷土かるた 〔宮城県名取郡中田村〕	S 6	斎藤富ら	一般農村としての落ち着きを取り戻すための郷土教育の必要性から	七五調 製作者		○		修身、読方、地理の各教科において利用される
橘陰郷土かるた 〔群馬県北橘村〕	S 8	今井善一郎	村の生活を愉快にし村の将来を豊かにしようと思わせるのはすべて郷土をよく理解する事の結果	七五調 製作者		S12に解説書 発刊		S60複製
松本郷土かるた 〔長野県松本市〕	S 9	開智小学校有志職員	郷土科の副教材として作成	五七五調 製作者	製作者			S52複製
高野山郷土いろはかるた 〔和歌山県〕	S 9	弘法大師御入定四百年記念		七五調				真言宗信徒向け? 絵葉書になっている
郷土いろはかるた 〔新潟県柏崎市〕	S10頃	柏崎市高浜小の教員		七五調 製作者				第二次大戦頃まで愛用されていた
越中郷土童謡かるた 〔富山県〕	S11	越中郷土研究社		童謡風 富山高校教授らの選考		○		S55薬日新聞で紹介される

戦 後								
名 称	製作年	製 作 者	主 旨	読 み 札	絵 札	解説文	地図	そ の 他
上毛かるた 〔群馬県〕	S 22	上毛かるた編集委員会製作 群馬馬文化協会発行	略(本文参照以下同じ)	七五調 一般公募の後編集委員で選考	小見辰男	○ 丸山清康		S23~現在まで県大会開催。 H6現在総発行部数106万8千部
沖繩ことわざかるた 〔沖縄県〕	S50	佐久田繁製作 月刊沖繩社発行						
ふくしま郷土かるた 〔福島県〕	S50	助福島青年会議所製作		五七五調	子どもに公募	○	○	
郷土かるた 〔山形県〕	S51	鶴岡市中央公民館製作 郷土かるた発行委員会発行						いろはかるた、一般募集のかるたがいくつかある
ふるさと新潟かるた 〔新潟県〕	S53	新潟日報事業者		五七五調 子どもに公募	子どもに公募	○		
阿波かるた 〔徳島県〕	S53	企画編集井上男 阿波かるた普及会	略	五七五調 三好正一郎	三好氏の妻	○ 三好正一郎	○	H5までの総発行部数2万5千部 町内で年一回井上氏が子どもを集め、大会を開催
信濃かるた 〔長野県〕	S54	堀籠ノエ子製作 信濃教育会出版発行	略	五七五調 製作者	外注	○		年平均5百部程度発行、お年寄りが購入
宮城のかるた 〔宮城県〕	S54	宮城のかるた編集委員会、明治図書館製作 宮城県中学校用品協会発売	略	五七五調 編集委員会	編集委員会	○		S62年に再版される初版、再版合わせて4万部作成
わたしたちの秋田 〔秋田県〕	S54	秋田県社会科教育研究会、明治図書製作	略	五七五調 研究会	研究会			5千部作成
いわてのカルタ 〔岩手県〕	S54頃	いわてのカルタ編集委員会、明治図書館製作 岩手県教育公社発行		五七五調		○		
わちしたちのいばらぎ 〔茨城県〕	S54頃	明治図書製作						

わたしたちの東京(23区) [東京都]	S54頃	明治図書製作						
わたしたちの北海道 [北海道]	S54頃	明治図書製作?						
琉球かるた [沖縄県]	S55	村瀬芳秀製作		五七五調		○ 別紙解説書あり		
大阪府かるた [大阪府]	S57	郷土かるた振興会製作	略	五七五調				
さいたま郷土かるた [埼玉県]	S57	埼玉県教育委員会製作。埼玉県子ども会連絡協議会発行	略	五七五調 小・中学生に公募	小・中学生に公募	○		S57～現在まで県大会開催
かがのとかるた [石川県]	S59	能登印刷製作「かがのとかるた」刊行会発行	略	五七五調 小学生に公募	小学校教諭作	○		五千部作成、S60に大会を開催するがそれきり
栃木県ことわざかるた [栃木県]	S60	県連合教育会製作、発行		七五調		○		
かごしま郷土かるた [鹿児島県]	S60	県教育委員会製作、県美育協会発行	略	五七五調 小・中学生に公募	小・中学生に公募	○	○	販売当初は、学校教育で活用されていた
語り伝えおかやま歌留多 [岡山県]	S61	岡山青年会議所	岡山の郷土文化遺産などの素暗らしさを伝えようとするもの					
房総子どもかるた [千葉県]	H1	千葉県教育委員会 千葉県子ども育成連合会	略	五七五調 千葉県教育委員会	千葉県子ども育成連合会	○		H1～現在まで県大会開催
ふるさとカルタ [山梨県]	H1	田高中学校製作 田富町発行						
郷土宮城のかるた	H5	県郷土資料編集委員会製作 宮城県学校用品協会発行	略	五七五調 製作者	製作者	○		

確認することができた(第4表)。これらの郷土かるたの製作年代に着目して時代区分を試みると、おおよそ次の三期に分けられるだろう。

まず第一期は、戦後の復興を目指して製作されたもので、昭和22年の「上毛かるた」がこれに相当する。1945年の敗戦当時、戦後復興と解放感により、社会教育活動は活発な動きを見せていた。その中で作られたのが「上毛かるた」ということになるが、詳細は後に回すことにして、いまのところこの第一期に含まれる郷土かるたは「上毛かるた」以外みつからない。

かなり間があいて、続く第二期は昭和50年代以降の「地方の時代」に製作されたもので、都道府県を対象とするかるただけでも、「さいたま郷土かるた」、「宮城のかるた」など18種存在する。「地方の時代」の到来の背景には高度経済成長の反省があるが、詳しいことは以下の文を参照されたい。

……1950年代後半からの高度経済成長は日本各地の急激な都市化を進展させ、人口移動を活発化し、多数の若者が郷土を離れて都市文化を享受することを可能にした。その一方郷土では、開発によって自然が破壊されたり、農村への都市化の浸透が、生活様式などの諸慣行を崩壊させたりし、過疎地域では慣行を支えていた集落そのものの存続さえ危ぶまれるようになっていった。その結果、郷土意識が改めて注目されるようになってきた。例えば、政府の国土政策でも1960年代の「新産業都市構想」に代わって、1970年代末から郷土の特性保存をねらいとする「定住圏構

想」が進められ、〈地方の時代〉というスローガンが掲げられ、地方の独自性や地方文化尊重の声<sup>13)</sup>が高まってきた。……

このような動向を背景に、学校教育の面では昭和52年度版学習指導要領において、地域の実態に即した学習が強調され、昭和57年には『小学校教育課程一般指導資料』<sup>14)</sup>として「地域の実態に即した教育課程」(文部省)が出された。また、昭和62年には、文部省『小学校 郷土を愛する心を育てる指導』<sup>15)</sup>が出された。このような時代背景をふまえて作られたのが、第二期の郷土かるたであるといえよう。同様にこの時期に、各市町村レベル、学校レベルという、より狭域を範囲とする郷土かるた<sup>16)</sup>が作られている。

また、第二期の郷土かるたの多くは、読み札や絵札を児童・生徒の公募としたり、読み札に取りあげられた事象の分布を示す地図が添付してあったり、従来七五調であった読み札が五七五調になっていたりしている。これらが従来の郷土かるたに対して特筆すべき変化であろう。さらにこの傾向は、続く第三期に製作された郷土かるたにも受け継がれているようである。

第三期は、昭和末期から現在にいたる“生涯学習時代”に製作されたもので、「房総子どもかるた」、「郷土宮城のかるた」などがある。また、昭和初期の郷土教育期に製作された上灘小「郷土かるた」が“生涯学習時代”になって改訂復刻されている。

生涯学習の構想は、1960年代半ばに、ユネスコの成人教育の主導者ポール・ラングランによって提唱された。ラングランは学校教育偏重の教育を批判し、「人間の一生を通じて行われる教育の課題—それゆえに全体として統合的であることが必要な教育の過程をつくりあげ活動させる原理として生涯教育という構想」を唱えた。これをきっかけにユネスコで審議されることになり、1972年に教育開発国際委員会が「Learning to be」と題する報告書を提出した。フランスの元首相・元文相フォール氏を委員長とするこのフォール報告書の中で「すべての人は生涯を通じて学習を続けることが可能でなければならない。生涯教育という考え方は、学習社会の中心である。」と述べている。また、1986年にロバート・M・ハッチンズが『学習社会』と題する著書を出版したことによって、生涯学習の必要性が世界的に強調されることになった。日本においても昭和50年代頃から議論されるようになり、中央教育審議会は昭和56年の「生涯教育について」という答申において、「広く社会全体が生涯教育の考え方に立って、各人の生涯を通じる自己向上の努力を尊び、それを正当に評価する学習社会を目指すことが望まれる。」と述べ、「学習社会」をめざすことを明らかにしている。<sup>17)</sup>

このような生涯学習社会を達成するためには、その学習する場所が必要に応じて用意されていなければならない。生涯学習時代にあっては学校、地域、家庭の三者いずれにおいても学習可能な体制、手段が必要とされる。この三者それぞれで様々な工夫がなされていることと推察されるが、生涯学習“社会”を創るには三者の連携があつてより効果を発すると思われる。もともと生涯学習は、学校教育偏重の批判から生まれたもので、学校教育の側でも現在、地域社会や家庭と学校との連携という観点が重要視されてきている。これについては、現行学習指導要領の総則の

なかで、「地域や学校の実態に応じ、家庭や地域社会との連携を深めるとともに、学校相互の連携や交流を深めること」と規定されていることから明らかである。本書で取り上げた郷土かるたも現在、学校、地域、家庭において子どもだけでなく、大人によっても親しまれ、利用されているものが多い。郷土かるたは三者を結び付け、連携を深めるための手段となっており、生涯学習（学習社会）の傾向にうまく適合していると思われる。なお、郷土かるたの他にも、各学校、各地域で連携のための様々な工夫がなされつつあり、それぞれが興味を引く活動であることも付け加えておく。

以上、戦後における郷土かるたの成立について、「戦後復興期」、「地方の時代期」、「生涯学習時代期」の三つの時代区分を試みてその動向を概観したが、続く節では、主に都道府県を対象としたいくつかの郷土かるたについての製作経緯や読み札及びかるた活動を紹介・解説することによって、それぞれの場合における郷土かるた製作の意義や性格などを具体的にみていきたい。特に、郷土かるた活動が本格的に展開している群馬県、埼玉県、千葉県<sup>18)</sup>の三県<sup>18)</sup>のかるた活動については詳細に述べたい。

## (2) 「上毛かるた」(群馬県)

### ①製作の経緯

「上毛かるた」ができたのは郷土かるたの時代区分でいうと、「戦後復興期」の昭和22年のことである。その誕生の経緯は群馬文化協会が発行している『上毛かるた40年の歩み』<sup>18)</sup>によると以下のようになっている。

……当時の日本は第二次世界大戦の敗戦という惨禍の中で、食べるものも着るものも十分でなく暗くすんだ世情にあった。その中で群馬県においては、せめて子どもたちに明るく楽しく希望のもてるなにかを与えられないだろうかという意識が高まり、当時数多くの戦争犠牲者を援護する目的で組織されていた「恩賜財団群馬県同胞援護会」が中心となってこの問題に取り組んでいくことになった。そして、「郷土を荒廃から救う」、「足もとから見直す」という主旨で、昭和22年1月11日付の上毛新聞紙上に「上毛かるた」製作の構想を発表し、「かるた」の中に何を読み込めばよいか、その編集資料を広く県民から募った。資料は最終的には272件集まり、この資料をもとにして教育関係者・郷土史研究者・文化人・報道関係者等の中から18人の編集委員を選び「かるた」の編纂を始めていった。まず、44枚の「かるた」になるよう内容の厳選が行われたが、民主主義の時代にふさわしく真に群馬県を代表するような史跡・名勝・人物・産業文化等を数多くの資料から選び出すことは大変難しい作業であった。また、選んだ資料を新しい仮名遣いや制限漢字・読みやすい七五調等に注意して読札を作っていくこともなかなか簡単にはいかず、大変な努力を要した。こうしてできた「かるた」の読札に対して取札の絵は小見辰男氏が、そしてこの「上毛かるた」の最も特徴的と言われる読札の裏にある解説文は歴史研究家の丸山清康氏がそれぞれ執筆し、昭和22年11月、構想から約10ヶ月というはやさで「上毛かるた」は完成し、第一回

の発行となった。……

このようにして誕生した「上毛かるた」は、その翌年から「上毛かるた競技県大会」が開かれたり、「かるた」に読み込まれた44ヶ所の現地に読札の文句を書き込んだ木札を立てる運動が行われたり、さらには昭和27年に群馬県児童福祉協議会が児童福祉法に基づく「優良文化財」に指定したりと、着実な発展を見せていった。また、昭和22年の発行当初から平成6年までの「上毛かるた」総発行部数は実に、106万8000部にのぼっていることから、「上毛かるた」が群馬県民の間に受け入れられ、親しまれている様子をうかがうことができよう。現在は一部500円で販売されており、販売利益は毎年二月に開催される上毛かるた大会の費用に当てられている。県内の各書店に並べられ、県民にとって手近で購入しやすいというところも、販売部数を増加させ、親近感を起こさせている理由ではないだろうか。

このように、「上毛かるた」が、群馬県を代表する教育的・文化的活動として、発展・定着してきた条件として、筆者らは次の2点を考えている。第1点は戦後、日本の新しい方向である民主主義の時代にふさわしい内容としたことであり、第2点は県民の叡智を集め、県全体の事業として行われ、県下の子ども会や小・中学校がこれに積極的に関わっていったことである。

さて、この「上毛かるた」44枚の読札を示すと第5表の通りである。読札の内容には史跡・名勝・人物・産業・文化があり、その分布は、県内のほぼ全域にわたっている。

第5表 「上毛かるた」の読札 (昭和22年)

い	伊香保温泉 日本の名湯	う	碓氷峠の 関所跡
ろ	老農 船津伝次平	の	登る榛名の キャンプ村
は	花山公園 つつじの名所	お	太田金山 子育呑龍
に	日本で最初の 富岡製糸	く	草津よいとこ 薬の温泉
ほ	誇る文豪 田山花袋	や	耶馬溪しのぐ 吾妻峡
へ	平和の使徒 新島 襄	ま	繭と生糸は 日本一
と	利根は 坂東一の川	け	県都前橋 生糸の市
ち	力あわせる 二百万	ふ	分福茶釜の 茂林寺
り	理想の電化に 電源群馬	こ	心の燈台 内村鑑三
ぬ	沼田城下の 塩原太助	え	縁起だるまの 少林山
る	ループで名高い 清水トンネル	て	天下の義人 茂左衛門
わ	和算の大家 関 孝和	あ	浅間のいたずら 鬼の押し出し
か	関東と信越つなぐ 高崎市	さ	三波石と共に 名高い冬桜
よ	世のちり洗う 四万温泉	き	桐生は日本の 機どころ
た	滝は吹割 片品溪谷	ゆ	ゆかりは古し 貫前神社
れ	歴史に名高い 新田義貞	め	銘仙織出す 伊勢崎市
そ	そろいの支度で 八木節音頭	み	水上 谷川 スキーと登山
つ	つる舞う形の 群馬県	し	しのぶ毛の国 二子塚
ね	ねぎとこんにゃく 下仁田名産	ひ	白衣観音 慈悲の御手
な	中山道しのお 安中杉並木	も	紅葉に映える 妙義山
ら	雷と空風 義理人情	せ	仙境尾瀬沼 花の原
む	昔を語る 多胡の古碑	す	裾野は長し 赤城山

## ②上毛かるた競技県大会

昭和22年に発行された「上毛かるた」であるが、早くも翌23年には第1回「上毛かるた競技県大会」が開かれ、その後今日まで47回もの大会が続けられている。第1回目の会場は前橋市南曲輪町の商工クラブであり、その後何回か場所を変え、現在は前橋市岩神町の県立武道館になっている。

大会の出場者は県内の小・中学校や各地区子供会の児童・生徒であり、小学生の部と中学生の部に分かれ、さらに各部内で団体戦（三名一組）と個人戦に分かれている。

「上毛かるた」競技県大会は毎年2月に開催される。その前年の12月頃から各地区子供会および各小・中学校レベルでの予選ともいえる大会を行い、その勝者が各市町村レベル、郡市レベルの大会に進み、さらにそこでの勝者が各郡市の代表選手として県大会に出場するという仕組みになっている。代表選手の中には数年続けて県大会に出場し、好成績を修めるものもある。昭和23年から平成6年までの「上毛かるた」競技県大会の参加団体数と選手数の推移をみると、第一回後しばらくは各小・中学校からの出場ばかりであったが、昭和41年の第19回以降、各地区子供会からの出場が目立ちはじめ、昭和46年には子供会数が小・中学校数を追い越し、現在では県大会は各地区子供会が中心となっている。また、県大会に参加する選手数は昭和40年前後は一時減少したものの、その後は増え続けていることから、県大会への意識は相当高いものとなっている。

以上のことから明らかなのは、今日「上毛かるた」は小・中学校よりも各地区子供会によって盛んに利用され、競技会熱も高くなってきているということである。このことは平成4年に群馬県子ども会育成団体連絡協議会から出版された『創立30年誌ぐんまの子ども会』<sup>19)</sup>のなかで、「上毛かるた」大会を主な活動の1つとしている子供会が、全68市町村子供会のうち54件に達すること（そのうち14件は「上毛かるた」大会の写真を掲載するほど盛況）からも明らかである。また、県内の各地区子供会に入会している児童・生徒の総数がおよそ20万人に達していることから、群馬県の多くの児童・生徒が「上毛かるた」で遊び育ってきているといえよう。こうした背景には、戦後の荒廃時に社会教育の立場から生まれた「上毛かるた」が、一時学校教育の力を借りて発展し、その後、地域の社会教育活動の再興・再活性化されたのを機に、本来の担い手に戻っていったということが考えられる。

## ③その他の活動

県全体の子ども会あげてのかるた大会の他にも、群馬県において「上毛かるた」は実に様々な場面に用いられている。たとえば県民向けの新聞紙面や雑誌、放送などでは、かるたに読まれてる事象を取り上げる場合、たいていその読み札とともに紹介される程である。活動としても、各単位子ども会主催の「上毛かるた廻り」<sup>20)</sup>や、個人製作の英語版「上毛かるた」を用いたかるた大会などが行われている。また、平成6年の県民人口200万人達成記念では、「上毛かるた」を用いた群馬県統計書『統計で見る上毛かるた』<sup>21)</sup>を発行したり、県主催の記念行事に参加した1000名の親子を対象とした「みんなでアタック！走る上毛かるた大会」などを行っている。このように、

群馬県において「上毛かるた」は、群馬県の文化の1つとして、ますます欠くべからざる存在となっているようである。

なお、群馬県においては、昭和50年代以降市町村レベル、学校レベルの郷土かるたも多数作られ、昭和63年現在合計40数種を数えている。

### (3)「さいたま郷土かるた」(埼玉県)

#### ①製作の経緯

「さいたま郷土かるた」が作られたのは、第二期の“地方の時代期”にあたる昭和57年である。製作者は埼玉県教育委員会、発行者は埼玉県子ども会連絡協議会である。読み札は第6表に示す。

今から13年前(昭和56年)、当時の県の教育委員会教育長の発案により、教育事業の一環として製作・活動が始められた。その際、群馬県の「上毛かるた」および「上毛かるた競技県大会」などを調査し、製作の参考にしたという。製作の意図として、県子ども会の関係者は次のようにいっている。“国際化とは日本を知り、郷土を知ることから始まるから、”郷土学習を始める小学3、4年生から郷土意識を高めるための手段として郷土かるたは有効であろう。また、“自己教育力などの新しい学力観は、学校だけでなく地域ぐるみで育てる必要があると思われる”。

第6表「さいたま郷土かるた」の読み札(昭和57年)

あ 荒川は 豊かな埼玉 つくる川	ね 姉さんの 幼い思い出 ひな人形
い 一枚に 心をこめて 小川和紙	の 農民の 苦しさ語る 秩父事件
う 梅の花 越生の里の 春日和	は はばたけ シラコバト 県の鳥
え 江戸に米 舟で運んだ 通船堀	ひ 百穴は 古代の人の 墓の跡
お 荻野吟子 日本の女医 第一号	ふ ふるさとの 伝統工芸 桐たんす
か 金鑽の 緑を映す 鏡岩	へ 平家の士 討って涙の 直実公
き キューボラの ならぶ川口 鋳物まち	ほ 宝蔵寺沼 ムジナモ 国の記念物
く くっきりと 大だこ揚がる 宝珠花	ま 万葉の 昔をしのぶ 小崎沼
け 県の旗 まがたま十六 心の輪	み 見えずとも 心で学ぶ 塙保己一
こ 子どもの日 大空泳ぐ 加須の鯉	む 武蔵一の宮 氷川神社の 大湯祭
さ 狭山湖を 香りでつつむ 茶の畑	め 明治四年 うぶ声上げた 埼玉県
し 重忠の 面影のこす やかた跡	も 森の道 ペダル軽やか 森林公園
す 住む人の 暮らし支えた 野火止用水	や やぶさめで 馬に乗る子の 勇ましさ
せ 千年の 歴史伝える 慈光の山寺	ゆ 雄大な 流れが光る 坂東太郎
そ 空高く 伸びよ埼玉 ケヤキの木	よ 養蚕の 技術進めた 木村九蔵
た 玉淀に 映る鉢形 城の跡	ら 羅漢様 笑顔泣き顔 勢ぞろい
ち 秩父路の 夜空にひびく 笛たいこ	り 両神山 ヤシオツツジに コノハズク
つ 土の香に ふるさとの味 深谷ねぎ	る るり色に 輝く秩父湖 二瀬ダム
て 鉄剣の 百十五文字 稻荷山	れ 霊場を まわるお遍路 秩父谷
と 栃本の 関所越えて 甲斐・信濃	ろ ローム層 郷土をおおう 火山灰
な 長瀬は 地質の宝庫 岩だたみ	わ 輪になって 秩父音頭で 盆踊り
に 日本の 産業育てた 渋沢翁	を 埼玉を かざる県花は サクラソウ
ぬ 沼や池 代用水で 田に変わる	ん 草加宿 今に伝わる 手焼きせんべい

読み札と取札（絵札）は、県の教育委員会が県下の小学校に対して、埼玉県の歴史上の人物や史跡、文化財、自然、産業などを題材に公募し、その中から県子ども会会長や埼玉大学教授ら全5名で選考していったものである。また、かるたに読まれた事象を埼玉県の地図に描き入れたイラストマップが、県立浦和第一女子高校まんが同好会によって製作された。こうして発案から約1年後、「さいたま郷土かるた」は完成した。1部650円で各学校を通じて販売されており、製作当初は37万部、近年1年間（平成4年現在）でも約1万1千部の売り上げがある。このことは「さいたま郷土かるた」が埼玉県の児童・生徒の間に急速に広まっていった様子をうかがえさせるだろう。かるた完成直後から県大会が開催されているが、その運営費はかるたの販売利益でまかなっているという。

## ②「さいたま郷土かるた」県大会

埼玉県においては、昭和57年の製作当初から今日にかけて毎年「さいたま郷土かるた」県大会が行われており、平成6年で12回を数えている。大会の主催は、県教育委員会と県子ども会連絡協議会である。大会の開催地は、県子ども会の下においた5つのブロック子ども会の持ち回りとなっており、当番となったブロックに大会の設営等の運営が任されることになっている。大会は小学生の部のみであり、県大会へは、各単位子ども会大会から各市町村大会、各支部大会を勝ち抜いてきた子どもが出場している。個人戦と団体戦に分かれているが、とかく同性で構成されがちな団体戦については、男女2人ずつのグループを組んで、そのうちの3人が競技するシステムになっている。県大会の出場者の多くは小学校高学年の子どもだが、最近では子どもの数が全体的に減っていることを反映してか、小学校3年生や中学年の子どもの姿もみられる。読み手や審判については、大会当初は子ども会育成者があっていたが、第3回大会以降の読み手には、かつて県大会に参加したことのある中学生、高校生が、小学生を導くジュニアリーダーという立場にたって、その役を務めている。審判役は現在ジュニアリーダーに移管中であり、審判講習会を開いたりしてその育成をめざしている。

歴代の成績優秀地域としては、県南東部の八潮市や川口市が目だっている。この理由として川口市の子ども会関係者の話をまとめると、東京都と近接しているこれらの地域では、人口移動が多く都市化しており、その中で新たな自治会活動の動きが見えているのだという。そしてその活動の主導者には地元育ちが多く、子どもたちに対するふるさと意識の涵養の一手段として郷土かるた活動に力を入れているということである。その結果が上位の成績として現れるものと推測されるが、このことは新たなコミュニティ活動の一端として、郷土かるた活動が意義付けられる可能性を指し示していると思われる。なお、都市化された地域だけでなく、比較的山間部である県中西部の小川町、茨城県と千葉県に近い県東部の白岡町も上位入賞を多く果たしており、これらの地域でも郷土かるた活動が活発に行われている様子である。

平成6年の第12回大会では、数回連続して出場する子どもと初出場の子どもの姿が見られ、「さいたま郷土かるた」大会が県下の子どものたちの中に定着し始めている、言い換えれば「さいたま

郷土かるた」自体が県全体に浸透しつつあるという現状を反映しているといえよう。ただ現在、子どもの数が極端に減っている子ども会や、大会参加費用の工面の煩雑さゆえに県子ども会から脱退したりしている子ども会などは、かるた大会に参加しない（できない）傾向にあることも事実である。

### ③その他の活動

「さいたま郷土かるた」製作後、埼玉県では、「おおみや郷土かるた」、「しき郷土かるた」など各市町村レベルの郷土かるたが多数製作されているのが特徴である。その多くは生涯学習期に含まれる平成以降の製作で、なかには読み札にローマ字読みをあてたユニークな郷土かるたも存在している。また、かるた活動に関する個人的な動向であるが、先の県子ども会の関係者の話によると、小学校五年の男子が夏休みの自由研究として、親子で「さいたま郷土かるた」に読まれている土地をまわったという事例があるという。製作から約10年経った今、「さいたま郷土かるた」は徐々に県下に根を広げ、随所で花を咲かせつつある状態といえよう。

## （4）明治図書の「郷土かるた」シリーズ

### ①製作の経緯

教育関係書籍を多数発行している明治図書では、昭和54年頃に学習教材部門において、11種の郷土かるたを製作している。といっても明治図書が単独で製作したわけではなく、企画を立てた後、事業に協力してくれそうな各地方の学校教育関係団体等に製作の話を持ちかけたのであって、実際の読み札、絵札等の製作にあたったのは、各地方の学校教育関係団体等である。この時期も第二期の「地方の時代期」にあたるが、明治図書が郷土かるた製作の企画を立てた理由としては、次のような背景があったという。

当時は高度経済成長の煽りで親子のコミュニケーションが断絶傾向にあり、出版物の流れとして親子関係を扱うものが多かった。一方、社会的に郷土かるた作りが1つのブームとなっている面もあった。そこで明治図書では、「人物、文化財、行事などの郷土の知識を得ることができるうえ、家族で共通の話題ができ、家族団欒の場が持てる」と見込んだ郷土かるたに注目した。そして販売対象を小学生、とくに社会科で市町村程度、都道府県程度の地域（郷土）学習をする3、4年生と設定し、教科書の代わりに用いられている副読本や地図、資料集等と同じように郷土かるたが活用されるだろうと判断し、事業としての採算も合うと考え、企画が進行した。郷土かるた製作の候補地としては、企画した明治図書東京支社管轄の東日本地方であること、かるたに読み込むだけの文化的・社会的な材料が揃っており関心を示してくれそうなところであること、販売組織がしっかりしていること等の条件が考慮された。そして候補となった地方の学校教育関係団体（社会科、国語科、図工科、美術科などの研究会）に製作の勧誘、依頼をし、最終的には宮城、秋田、岩手、会津、茨城、東京（23区）、静岡（駿河）、西三河、名古屋、尾張、石川の合計11種の郷土かるたを製作することが決定した。題材設定及び解説文は社会科、読み札は国語科、

絵札は美術科の教師がそれぞれ担当し、お正月遊びという季節をターゲットに製作が進められていった。各郷土かるたの製作部数は、平均1万部程度であり、秋田、宮城、茨城では、増刷される程需要が高かった。各郷土かるたは各地方の小学校に1部ずつ配布され、一般には1部450～500円で販売された。以下「宮城のかるた」、「わたしたちの秋田」の二種について、製作の経緯等を紹介していくことにする。

## ②「宮城のかるた」（宮城県）

「宮城のかるた」が製作されたのは昭和54年のことで、製作者は県内の教諭で組織した「宮城のかるた」編集委員会と明治図書、発行者はみやぎ生協内にある宮城県学校用品協会である。宮城県学校用品協会は宮城生活協同組合の子会社で、昭和27年に誕生した団体である。なお、宮城県内においては市町村を対象とした郷土かるたはあったらしいが、県を対象としたものは今回が初めてであった。「郷土かるた」製作のきっかけとしては、明治図書から宮城県学校用品協会に郷土かるた作成の声がかかったことにある。宮城県学校用品協会では勧誘当時、地域の教育力や郷土学習が重視されていたという情勢を鑑み、採算は合うだろうと考えて、生協の運営事業として発行することを決定した。実際の製作は「宮城のかるた」編集委員会に託され、読み札は6名、絵札は2名の編集委員（教諭）が作製した。内容は社会科に関するものが中心で、絵札の裏には個々の解説文が付いている。また、昭和62年には内容を部分的に修正した再版が作られた。初版は1部600円、再版は1部700円でそれぞれ約2万部ずつ作製され、販売された。

「宮城のかるた」は以下の三団体から推薦を受けた。

宮城県PTA連合会、宮城県連合小学校教育研究会、宮城県連合小学校教育研究会社会科研究部会

## ③「わたしたちの秋田」（秋田県）

「わたしたちの秋田」が製作されたのは、昭和54年で、製作、発行ともに秋田県社会科教育研究会と明治図書である。読み札は第7表に示す。秋田県社会科教育研究会は県内の小・中学校の社会科の教員で組織された教育団体で、当時、明治図書からの勧誘を受け、郷土かるたの製作を決定した意図として同研究会関係者は以下の諸点をあげている。

- ・遊びながら楽しく古里を学ぶ
- ・自分たちは歴史の流れの中で生きていることがわかる
- ・歴史の重みを実感できる
- ・昔の人々の祈りや願いを知ることができる
- ・無意識に見過ごしたものに生命を与える
- ・郷土愛を育てる、または郷土を知る（関心の）動機付けになる
- ・発展的に物事を見つめていく
- ・心豊かな人間に育つ
- ・PTA会員や地域の人々の啓発に寄与する

第7表 「わたしたちの秋田」(昭和54年)

あ 秋田フキ 雨ふり出せば かさになり	ぬ 塗りものと うどん産する 稲川町
い 石だたみ 名残りが語る 久保田城	ね ネムの花 歴史を語る 蛸満寺
う 美しい おばこの願い 小町堂	の 農民の 心ささえる 石川翁
え 絵灯ろう 夏の星の夜 いろどりて	は 八森は むかしハタハタ いま観光
お 大曲 花火でにぎわう 夏祭り	ひ 人の波 老いも若きも 綱を引き
か かん灯の 光ゆらめく 夏の夜	ふ 富士に似て すがた美し 鳥海山
き きりたんぼ 今日も家族で 舌づつみ	へ へんぼんと 南極の地に 旗を立て
く 黒鉱が 光り輝く 資源の地	ほ 北限の 茶を産するは 桧山の地
け 県ざかい 仙岩トンネル 開通し	ま またぎ村 むかしのままで 狩りをする
こ 駒ヶ岳 夏は登山に 冬スキー	み 水ごりで はだか参りの 新山神社
さ 猿倉の 人形芝居は 文化財	む むかしから 湯沢の里に 銘酒あり
し 神殿に 舞楽おごそか 大日堂	め めずらしい ぜんまい織りの 亀田の地
す 砂の丘 松の木ならぶ 防砂林	も モデル村 建設さかんな 干拓地
せ 仙北の 米をはこんだ 雄物川	や やぐらあと 石油王国 今はなく
そ そびえ立つ 四本えんとつ 発電所	ゆ 雄和の地 空の玄関 新空港
た 田沢湖を 守る辰子の 金色像	よ 米代を いかだで下る 秋田杉
ち 忠実に 主人を待った 秋田犬	ら 蘭画かき 小田野直武 世に知られ
つ 綴子太鼓 百人あまりの 行列で	り リングの木 平鹿の里に よく育ち
て 天然の 杉でまさ目の 曲わっぱ	る 類似する ストーンサークル なに語る
と 十和田湖の ヒメマス育てた 和井内貞行	れ 歴史を語る 大名行列 ねり歩き
な なまはげに わんぱく小僧 首すくめ	ろ ろうそくに かまくら映えて 子らつどう
に 西馬音内、一日市、毛馬内 盆おどり	わ わが県の 鳥はヤマドリ 花はフキ

- ・家族が皆で仲よく巡回し、話題が豊富になる
- ・幼稚であるが読むより早く覚え基礎ができる

実際の製作は、研究会の野上氏を主軸とした役員が行った。その際、各市町村ごとの研究会員が寄せた資料や郷土史研究家の意見も踏まえ、秋田県の自然、言い伝え、神社仏閣、工芸芸能、人物、地名のいわれ、特産、資源などについて44枚の読み札の3倍くらいを製作した。それらを厳選して完成したのが「わたしたちの秋田」である。1部の値段は不明だが、5千部作成された。地元紙である秋田さきがけ新報にも紹介された「わたしたちの秋田」は、発売当初、小学生、特に小3、小4、中1（地理）の社会科郷土資料として用いられ、人物・開発的内容については道徳に取り入れられたりするなど、学校全体での活用を期待され、かつ実施されていたらしいが、具体的な活用事例は不明である。現在は製作、販売ともになされていないが、子どもたちはその存在を知っていて遊ぶ者も若干おり、公民館や子ども会の行事としても使用されているらしい。聞き取り調査をした秋田市立桜小学校では「昔の遊びクラブ」の活動のなかで使用しているということである。

## (5) 「大阪府かるた」(大阪府), 「かがのとかるた」(石川県), 「かごしま郷土かるた」(鹿児島県)

「さいたま郷土かるた」, 「明治図書郷土かるたシリーズ」の他に, “地方の時代期、に製作された郷土かるたをいくつか紹介しよう。

## ① 「大阪府かるた」(大阪府)

「大阪府かるた」が作られたのは昭和57年で, 民間団体である郷土かるた振興会(代表 別所やそじ氏)の製作, 発行となっている。1部の値段は300円である。このかるたの特徴として興味深いのは, 使用者側がかるた作りに参入できるところにある。というのも, かるたの読み札, 絵札(色抜き)はできあがっているものの, かるたの札が切り取り式になっているうえ, 色抜きの絵札には好みに応じて自由に色付けできるようになっており, さらには札をいれる箱の展開図まで用意されているなど, 使用者自身の手を加える余地を残しているのである。これらにより完成させた郷土かるたは, 使用者オリジナルのものという親近感をわかせると思われ, また, 読まれている個々の事象についても, より身近に感じたり, 関心が高まったりという効果が期待されよう。なお, 郷土かるた振興会は「大阪府かるた」以外にも「行基かるた」, 「利休かるた」など人物を題材にしたかるたも製作している。別所氏自身も郷土かるた振興会とは別の団体の中心となって,

第8表 「かがのとかるた」の読札(昭和59年)

い	イヌワシの 勇姿にあすの 石川県	う	卯辰山 秋声鏡花の 文学碑
ろ	ロクロ挽き 五彩あざやか 九谷焼き	の	能登島の 大橋渡り 水族館
は	波濤裂け 奇岩奇石の 能登金剛	お	お旅まつり 子供歌舞伎に 人の波
に	日蓮の 教え伝える 妙成寺	く	黒百合と 万年雪の 加賀白山
ほ	ボラ待ちの 丸太のやぐら 穴水湾	や	家持の 歌に詠まれた 珠洲の海
へ	平国祭 入らずの森の 気多大社	ま	窓岩へ 飛び来る曾々木の 波の花
と	富樫泣く 安宅の関の 勸進帳	け	県民の 水をたたえる 手取ダム
ち	千里浜の 渚ドライブ 波しぶき	ふ	ふるさとの キリコが揺らぐ 能登の夏
り	理知の人 西田哲学に 名を残す	こ	米どころ 百万石の 金沢平野
ぬ	塗り重ね 沈金さえる 輪島塗	え	江戸村に しのぶ昔の 暮らしぶり
る	流人塔 平家ゆかりの 時国家	て	天文学に 木村栄の Z項
わ	わびさびを うたう千代尼の 聖興寺	あ	海士の手に あわびさざえの 舳倉島
か	河北潟 豪商銭五の 夢ここに	さ	犀川の 流れも清し 犀星碑
よ	義仲の 火牛のいくさ 倶利伽羅峠	き	肝つぶす 子らは肩ごし あまめはぎ
た	高峰譲吉 アドレナリンの 生みの親	ゆ	雪づりに 淡雪やさし 兼六園
れ	歴史咲く 県都金沢 森の町	め	目に青葉 デカ山を曳く 青柏祭
そ	総持寺の 門前にぎわう 放生会	み	見るほどに 木目美しい 山中塗
つ	つくり酒 伝統生かす 能登の杜氏	し	縄文の 真脇遺跡に 見る昔
ね	年年に 伸びる小松の エアポート	ひ	兵四郎 知恵と技術の 辰巳用水
な	名も美し 白山比咩の 初詣	も	紅葉踏み 那谷寺ゆけば 芭蕉の碑
ら	落日に 礎石苔むす 天平寺	せ	禅の道 世界に広めた 鈴木大拙
む	結ぶ袖 友禅流す 浅野川	す	すくすくと 伸ばせ貝木 アテの森

「パパママかるた」、「長寿かるた」、「堺かるた」などを製作している。特に、市町村を対象とした郷土かるたといえる「堺かるた」に関して、同氏は堺かるたの本を編集し、その中でかるたに読まれた個々の事象の解説や、堺かるたの歌、堺かるたをめぐるコースの紹介などを行っている。また製作当初しばらくの間は、堺かるた大会が催されていたようである。

この「大阪府かるた」をはじめ、大阪府内で昭和52年～昭和61年の間に各種の団体によって作られた郷土かるたが、大阪市立中央図書館に現在17種類保管されており、昭和62年12月1日～昭和63年1月30日に、同館でこれらの資料展示を行ったことを付け加えておきたい。

## ②「かがのとかるた」(石川県)

「かがのとかるた」が作られたのは昭和59年で、製作者は能登印刷、発行者は「かがのとかるた」刊行会である。読み札は第8表に示す。製作のきっかけは、昭和58年頃、金沢大学に出入りしていた能登印刷の奥平氏が、群馬県出身の金沢大学の学生から「上毛かるた」の話聞き、関心を持ったことにある。その後同氏の呼び掛けにより、明るい社会づくり石川県民会議、石川県健民運動推進本部、石川県児童文化協会、石川県子ども会連絡協議会、石川県教育文化会議、北国文化事業団らで組織する「かがのとかるた」刊行会を発足させ、能登印刷が主導となって、かるた製作を進めていった。読み札は各小学校の子どもたちから公募し、絵札は1人の小学校教諭が製

第9表 「かごしま郷土かるた」の読札(昭和60年)

あ 荒崎に シベリアの友 渡り来る	ね 音色にも 剛気さ残す 薩摩琵琶
い 岩はだに 黒潮おどる 佐多岬	の のちの世に 武勇を伝える 隼人塚
う 海ん衆が 道しるべにした 薩摩富士	は 春の野に 優しくほほえむ 田の神さあ
え えいやあと 気合いするどく 棒踊り	ひ 人波に おされて見入る 大綱引き
お おおみそか こわいぞトシドン やって来る	ふ 吹上の 浜風すずし 潮干狩
か 輝きを 今に伝える 薩摩切子	へ へこたれず おみこしかつぐ ほぜ祭り
き 木曾川の 水を治めた 薩摩義城	ほ 堀のはす 昔をしのぶ 鶴丸城
く 黒砂糖 味と香りで 島自慢	ま 松風に ミヤマキリシマ 咲き乱れ
け 県木の くすの若葉が かぐわしく	み 緑こい 歴史の町の 武家屋敷
こ 甲突の 流れに映える 石の橋	む 昔から 変わらぬ切れ味 種子ばさみ
さ さつまいも シラス台地に 根をおろし	め 明治維新 大活躍の 大久保公
し 潮風に 耐えてかれんな 鹿の子百合	も もくもくと 薩摩の印 桜島
す 数千年 昔を語る 屋久の杉	や 弥五郎どん 大きな体で ノッシノシ
せ 背の鈴に 豊作祈る 馬踊り	ゆ 夢のせて 宇宙へ羽ばたく 種子島
そ 曾木の滝 大地ゆるがす ナイアガラ	よ 洋風の 名残ただよう 異人館
た 高倉に 奄美の人の 知恵を知る	ら 乱世の 流れを変えた 火縄銃
ち チェスト行け 山坂達者の 妙円寺	り 輪読会 薩摩の兵児が 舎に集う
つ 紬織る おかあさんの手 魔法の手	る ルリカケス みんなで守ろう 県の鳥
て 点々と トカラを渡る 鳥サシバ	れ 黎明館 日本の夜明け ここに見る
と 陶工の 技を伝えた 薩摩焼	ろ 六月灯 薩摩の国の 夏祭り
な 夏の夜 曾我の傘焼き 天に映え	わ 輪になって みんなで踊ろう おはら節
に 日本の 歴史をかえた 西郷さん	を 汗をかき みんなで築こう ふるさとを
ぬ ぬくもりの 心が伝わる 鹿児島弁	ん 波静か 水もきれいな 錦江湾

作した。1部650円で5千部作成され、各学校、一般に対して販売された。製作の翌年の昭和60年春には、「かがのとかるた」大会が開催されているが、大会は1回きりであり以後継続はされなかった。学校教育の面においては、発売当初はいくつかの学校で購入され、活用されていたようだが、その例は僅少ということである。「かがのとかるた」は現在でも市販されており、学校での購入も時折みられている。

### ③「かごしま郷土かるた」(鹿児島県)

「かごしま郷土かるた」が作られたのは昭和60年で、製作者は鹿児島県教育委員会、発行者は鹿児島県美育協会である。読み札は第9表に示す。鹿児島県で郷土かるたが作られた下地には郷中教育といわれる郷土教育の伝統が息づいていたことも大きく関係している。当時、県の社会教育課では、郷土教育の一環として、郷土の本当の良さを再び見直そうという主旨で、美術担当指導主事の小藪氏を中心に、県教育委員会、大学教員、マスコミ関係者ら7～8名で製作委員を編成し、郷土かるたの製作に当たっていった。かるたの製作には、県内の小・中学校、高校の美術教諭で組織する鹿児島県美育協会の協力も添えられた。読み札、絵札とも県内の各小・中学校の子どもたちに対して募集され、集まった読み札は製作委員、絵札は美育協会によってそれぞれ選定されていった。製作、販売部数は不明であるが、1部700円で県下の各書店を通じて販売された。小藪氏によると、販売当初は各学校でかなりの活用がみられたらしい。

## (6)「阿波かるた」(徳島県)、「信濃かるた」(長野県)

個人の発案によって製作された郷土かるたを二種紹介する。これらの製作も「地方の時代期」である。

### ①「阿波かるた」(徳島県)

製作年は昭和53年で、製作者は井上男氏、発行者は阿波郷土かるた普及会である。井上氏は郷土研究家で、阿波文化サロン、阿波文庫の主宰を務めている。読み札及び解説文は、当時徳島市の高校教諭(日本史)に、絵札はその妻によって製作された。平成5年までに2万5千部程発行されている。発行当初は販売数が多かったが、現在では少なくなっているということである。

### ②「信濃かるた」(長野県)

製作年は昭和54年、製作者は一主婦の堀籠ノエ子氏で、発行者は信濃教育会出版である。年平均500部程度の購入がみられ、その大半はお年寄りによるものだという。

## (7)「房総子どもかるた」(千葉県)

### ①製作の経緯

「房総子どもかるた」は、平成元年に、子ども会活動として、また生涯学習としての意義を期待されてできた郷土かるたである。製作者は千葉県教育委員会と千葉県子ども会育成連合会、発行者は千葉県子ども会育成連合会である。読み札は第10表に示す。

第10表 「房総子どもかるた」の読札（平成元年）

あ 青葉の森 自然を学ぶ 博物館	ね ねがいごと かなえて 成田の不動様
い 市川に 昔をしのお 手児奈堂	の 野田、銚子 しょうゆは 江戸の昔から
う 牛たちも ぼくらの仲間 マザー牧場	は 花は白 房州ビワは 黄色の実
え 江戸川に 香る野菊の 矢切りの渡し	ひ ひざし浴び 色とりどりの 花畑
お 大空に そびえるお堂は 笠森寺	ふ 冬もあたたか 白い灯台 野島崎
か 勝浦の 海の公園 魚の群れ	へ 平和の翼 世界に向けて 新空港
き 鬼来迎 今に伝わる 地獄劇	ほ 星の夜 茂原 七夕 人の波
く 九十九里 長い砂浜 いわし漁	ま 幕張りの メッセに集う 世界の人々
け 溪谷の流れ 清らか 養老川	み みんな仲よし 遊んで楽しい
こ 昆陽が 甘藷育てた 千葉の土	ディズニーランド
さ さわやかに 緑に映える 大多喜城	む 昔知る 土器や貝塚 加曾利の地
し シャチの芸 拍手かっさい シーワールド	め めざましく 開けるまちに
す すくすくと 県の木 マキは緑色	古街道（水戸街道）
せ 世界の野鳥 守る 山階鳥類研究所	も 森の中 さえずるホオジロ 県の鳥
そ その昔 房総舞台に 八犬士	や 谷津干潟 野鳥がとどける 季節の便り
た 忠敬は 歩いて 日本の地図づくり	ゆ ゆれてさく 県花 菜の花 房州路
ち 千葉県 暮らしささえる 利根の水	よ 夜桜で にぎわう 東金 八鶴湖
つ 月夜には たぬきうかれる 証誠寺	ら 落花生 地中に実る 千葉の味
て 伝統の 佐原ばやしに 山車もゆれ	り リュック 背負って巡る 県民の森
と とっばずれ 銚子漁港に 大漁旗	る るんると 野外活動 自然の家
な 仲良しの ぼうげん楽し ワンパク王国	れ 歴博で ぐらしの歴史 見て学び
に 日蓮の 誕生祝う 鯛の浦	ろ ロープウェー 登ってひらける 鋸山
ぬ 沼一面 野鳥が遊ぶ 印旛沼	わ わき出るよ 堀り抜き井戸の 上総掘り

製作のきっかけは、昭和61年頃、子ども会関東甲信越静連絡協議会において、群馬県、埼玉県の子ども会で郷土かるた活動をしていることが話題になったことにある。千葉県の子ども会では、県内全域の子どもたちが集団で取り組むことのできる活動を探求しており、他県の郷土かるた活動に触れて関心が高まり、製作の話が浮上したのだという。ちょうどそのころ文部省では、青少年の健全育成に関して、ふるさと意識の醸成や集団活動の体験などの事業を推進していた。これらの事業と郷土かるた活動の理念が一致したこともあって、当時の県教育委員会社会教育課長の働き掛けにより、文部省から補助金を得ることができ、その費用でかるたの製作を始めていった。

読み札の製作は、教育委員会の県下11支部のなかから県教育長の任命した、学校教育関係者、社会教育関係者、学識経験者ら15人からなる委員会を中心に進められていった。その内容は房総百選、および県を代表するような歴史的人物や事象の中から県内全域にわたるよう選定されていった。絵札の製作は小・中・高等学校の教諭からなる県の造形教育研究部会のメンバー8名が担当した。

このようにして平成元年に完成した「房総子どもかるた」は1部600円で、5000部作成された。そのときの作成費用は、文部省が主催する第一回生涯学習フェスティバル（於千葉県）の関連費用があてられた。平成元年当初は、県下4千ある単位子ども会に1部ずつ、各市町村子ども会育

成会に数部ずつ無料で配布された。その後、平成2年には子ども会の予算で3万部印刷され、そのうち平成5年までに9700部販売されている。

## ②「房総子どもかるた」県大会

千葉県においても、平成元年の製作当初から毎年「房総子どもかるた」県大会が開催されており、平成5年で5回目をむかえている。大会の企画、運営は製作者である県子ども会育成連合会が中心になっているが、大会日時だけは、もう一方の製作者である県教育委員会社会教育課が生涯学習の行事日程として決定している。このことから千葉県では、「房総子どもかるた」およびその県大会を、生涯学習の一環としても位置付けていることが明らかであろう。

千葉県の場合、子ども会への加入方法が任意加入と自動加入の二種あり、すべての子どもが子ども会に所属しているというわけではない。こうした理由もあってか、県大会への参加は子ども会組織にとらわれず、個人の申し出によるものとなっている。競技は個人戦と団体戦(3名1組)にわかれており、小学校1年生から中学校3年生までの幅広い年齢層の参加がなされている。参加した子どもたちの意識について県子ども会が推察するには、チームの協力ということから、集団意識、地域社会(市町村程度)への所属意識は育成されているようだが、県全体への所属意識はまだ弱いということである。読み手や審判は中、高校生のジュニアリーダー、大学生以上の青年リーダー約150名が講習会を経てそれらの役にあたっている。

成績優秀地域としては、南房総の白子町、袖ヶ浦市、大網町が目だっていて、県大会への関心の高さを窺わせる。逆に関心が低いのは松戸市や柏市などの都市化地域であり、同じ都市化地域でもかるた活動の盛んな埼玉県川口市の場合とは異なる傾向をみせている。ただ松戸市では市制50周年を記念して、「松戸市かるた」を製作していることから、県というよりもむしろ市としてのまとまりを高めようとする意向がみうけられる。

かるた大会以外の「房総子どもかるた」の活用例としては、学童保育での使用、子ども会に新規加入した児童へのプレゼントなどがみられるが、学校教育での活用状況は不明である。

## (8)「郷土宮城のかるた」(宮城県)

宮城県では前述したように、昭和54年に明治図書と協同して「宮城のかるた」を製作している。それから時を経て、「宮城のかるた」製作当時の人々が中心となり、平成4年に小学校の校長や教諭で組織する全14名の県郷土資料編集委員会を発足させ、内容を一部改めて製作されていたのが「郷土宮城のかるた」である。発行、販売を請け負ったのは前作と同様、宮城県学校用品協会である。読み札は第11表に示す。

前作の「宮城のかるた」は、社会科の教諭が中心となって製作されたので、社会科的内容の濃い性格だったが、今回は社会科、国語科、図工科、理科、生活科の教諭らが編集委員となって読み札、絵札の製作に取り組んだので、社会科に限らずより広範な内容を読み込んでいる。これは、新しい郷土かるた製作の意図として、新学習指導要領(平成元年度版)で新設された生活科への

第11表 「郷土宮城のかるた」読札(平成4年)

あ 青葉城 伊達政宗の 騎馬の像	ぬ ぬきん出た 郷土の力士 横綱谷風
い イヌワシが 大きな輪をかく 翁倉山	ね 願いこめ ゆれる短冊 仙台七夕
う うーめんと 和紙がじまんの 白石市	の 後の世に 教え残した 三陸津波
え エコーライン 蔵王は駒草 樹氷の名所	は 発展する 水産加工の 塩竈市
お おいしさが じまんの水は 大崎耕土	ひ 人の波 初午みこしの 竹駒神社
か 蒲生の干潟 水鳥たちの 生息地	ふ 船岡は 桜並木と 菊人形
き 木々の葉に 光こぼれる 定禅寺通り	へ 便利な運河 米を運んだ 貞山堀
く ぐらしの水 たたえる釜房 七ヶ宿のダム	ほ 貿易と 海の玄関 仙台港
け ゲンジボタル 飛び交う沢辺の 夏の夜	ま 孫兵衛が 苦心の工事 北上川
こ 荒城の月 土井晩翠の 名は今も	み みちのくに 金ととれたと 黄金山
さ 三郎が 土こぼしたという 七ツ森	む 陸奥国府 むかしの都 多賀城市
し 縄文の 貝塚残す 七ヶ浜	め 明治の面影 今に伝える 登米小学校
す すすり石 雄勝の生産 日本一	も 杜の都 地下鉄走る 仙台市
せ 世界へと 大きくはばたく 仙台空港	や 野生の鹿 原生林の 金華山
そ 空を染め 大崎八幡 どんと祭	ゆ 湯けむりの 鳴子温泉 こけしの里
た 旅人は 花山御番所で 手形見せ	よ 用水を 角田に引いた 善右衛門
ち 千賀の浦 ご座船うかべて 港祭り	ら 雷神山 豪族ねむる 大古墳
つ 常長が ローマへ船出 月の浦	り 陸中の 大波分ける 巨釜半造
て 手をかけて ハウスに実る 亘理のいちご	る るり色の 大漁旗はためく 気仙沼
と 堂々と 国宝の建物 瑞巖寺	れ 列作り 白鳥北から 伊豆沼へ
な なつかしい 素朴さ守る 堤人形	ろ 六百年 継がれた芸能 火伏せの虎舞い
に 日本三景 松島めぐる 遊覧船	わ わらじはき 干拓すすめた 三之助

対応、遊びと学習の一体性、親子の会話のきっかけづくり、子どもだけでなく大人に対する宮城再認識への期待などがあったことに大きく関係する。

「郷土宮城のかるた」は、1部800円で1万5千部作られ、地元紙である河北新聞や生協の共同購入者案内チラシ等で紹介されたが、主に各学校、各幼稚園を対象として販売されていった。販売状況は、対象学年に設定された小学校3、4年生での購入率が高く、一方で1、2年生での需要も少なくなかった。これは、かるた遊びに対する親自身の愛着と子への継承、また学習教材として適切と判断した親の教育的配慮等によるものとみられている。ちなみに米農家を営む家庭の多い宮城県では、平成5年の冷害の影響を大きく受けたこともあって、平成5年度は当初予定してしたほど販売数は伸びなかったという。

「郷土宮城のかるた」は、各家庭での活用が盛んなようであるが、学校教育においても郷土学習に熱心な教諭は、かるたの内容を調査したりして授業に使用することがあるという。編集委員会の会長でもある煤田泰三氏が校長を務める仙台市松島小学校では、平成5年10月頃、かるたを使った小学校4年生の社会科授業を行った。その授業風景はNHKイブニングネットワークみやぎで放映されている。授業をうけた児童の感想としては、かるたは「楽しい」という声がある一方で、「自分は持っていないから遊ばない」という声もあり、浸透状況の一片を窺わせる。その他の活用事例としては、宮城県から転出した親類などに郷土意識を呼び起こしてもらおうと、プレゼン

トとしたりするケースがみられるという。

「郷土宮城のかるた」は以下の団体から推薦を受けた。

宮城県PTA連合会、仙台市小中学校PTA連合会、宮城県連合小学校教育研究会、  
仙台市小学校教育研究会、宮連小教研社会科研究部、宮連小教研国語研究部、  
宮連小教研図工研究部、宮連小教研生活科研究部

## 5 ま と め

本研究は、戦前、戦後における「郷土かるた」の全国的動向について、聞き取り調査及び文献調査に基づいて、社会科教育の視点から研究・考察したものである。その内容をまとめると以下のようなになる。なお、戦前の「郷土かるた」の特徴については、第3章のおわりにまとめたので、詳細はそちらを参照いただきたい。

①戦前においては、昭和初期の郷土教育期に、主に市町村を対象とした「郷土かるた」が製作され、学校教育等で活用されていた。

②戦後においては、群馬県の「上毛かるた」（昭和22年製作）を始まりとして、都道府県、市町村、学校等で「郷土かるた」が多数製作されてきた。現在、都道府県を対象とした「郷土かるた」は、全国の約2分の1の都道府県に存在している。

③戦後に作られた「郷土かるた」（都道府県かるた）の動向は、その製作年や製作の意図からみて、大きく三期に区分される。

一、戦後復興期…戦後復興と解放感の漂う中、文化による再建の願いをこめて「郷土かるた」が製作された時期である。この時期に該当するものとしては、唯一群馬県の「上毛かるた」がある。

二、地方の時代期…高度経済成長の反動により、郷土意識や家族意識への再注目が叫ばれるなか、その期待を託されて「郷土かるた」が製作された時期である。埼玉県の「さいたま郷土かるた」や明治図書の「郷土かるたシリーズ」など、戦後の三期の中では最も数が多い。全国的に「郷土かるた」製作が盛んに行われていた時期である。

三、生涯学習期…今日、生涯学習の一方法として、また、学校、地域、家庭の三者連携の手段として、「郷土かるた」が製作されている時期である。数的にはまだ少ないが、千葉県の「房総子どもかるた」や宮城県の「郷土宮城のかるた」などがある。

④戦後においては、学校や企業団体、個人が製作した「郷土かるた」もあるが、特に社会教育（主として子ども会活動）の一環として製作されたものが多い。

⑤群馬県、埼玉県などでは全県的な規模で「郷土かるた」活動が展開され、大変注目される。しかし、「郷土かるた」を製作したきりとか、今となっては活用していないといった傾向の方が多く見られる。

⑥「郷土かるた」の製作過程においては、読み札ないし絵札を児童・生徒に公募したものが多く、実際に活用する立場からの、郷土に関する多様な視点が集まると共に、子どもを製作に参加させることによって「郷土かるた」への興味関心を高めようとする配慮が感じられる。

⑦読み札の句調は、戦前においては、「ことわざかるた」の伝統を受け継いだ七五調が適用されていたが、戦後の「地方の時代期、頃から、五七五調を取るものが急増し、現在では五七五調が中心となっている。これは、五七五調のほうが織り込む事象をより多く、より詳しく表現できるためと推察される。しかし、伝統的な七五調の方も、長い歴史を持つだけあって、その特性は注目に値するであろう。ともあれ、七五調、五七五調とも、「いろはかるた」の特徴であるリズム定型詩を原則としていることでは変わりはない。

⑧「郷土かるた」製作の目的は概して、郷土認識の形成や、集中力・規範性の育成、集団活動に必要な能力・態度の育成にあてられている。

以上の考察をもとに、「郷土かるた」の持つ社会科教育的意義を考えると次のようになろう。

「郷土かるた」は「遊びながら自然に」、郷土知識や郷土意識を高めたり、集中力・規範性などの諸能力・態度を育成したり、人間相互の交流を生んだりしている。また、年月を経るとともに「郷土かるた」そのものが貴重な文化遺産としての価値を持つてくる。このように、多様な教育的・文化的価値を内包していることから、「郷土かるた」を社会科教育の立場から取り入れ、活かしていく意義は大きく、また可能であると考えられる。

今後の課題は、さらに多くの地域の「郷土かるた」及びその活用事例等の調査を通して、社会科教育（学校教育）における「郷土かるた」の意義について、また社会教育や家庭教育も視野に入れた中で「郷土かるた」の意義についてより深く検討していくことである。

謝辞 本稿をまとめるにあたっては多くの方々にお世話になりました。村井かるた資料館村井省三館長、財団法人群馬文化協会小林徳雄理事、群馬県子ども会育成会の後藤守吉会長及び関係者、埼玉県子ども会育成会の高木伊佐男会長及び関係者、千葉県子ども会育成会の伊藤孝子副会長、宮城県学校用品協会小林茂氏、秋田市立桜小学校佐藤喜代治校長、明治図書出版押木昭二氏、群馬大学教育学部附属小学校・附属中学校・太田市立九合小学校・太田市立南中学校の各学校関係者、その他紙面に記載できなかった方を含め、お世話になったすべての方々に対し、心からの感謝とお礼を申し上げます。

#### 注及び参考文献

- 1) 中村俊男(1991):「カルタづくりいろいろ工夫例」、『社会科教育』358号。  
秦セイ(1993):「グループ活動を中心にした学習指導案例—6年歴史かるたの作成過程を通して—」、『地域史の教材化』(明星出版), pp.60-68。
- 2) 原口美貴子・山口幸男(1993):「群馬県の歴史的人物知識と上毛かるた—大学生・中学生に対する調査」,

- 『群馬大学社会科教育論集』第2号(群馬大学教育学部社会科教育研究室), pp.139-149。
- 原口美貴子(1994):「群馬県の史跡知識と上毛かるた一小・中学生に対する調査一」,『群馬大学社会科教育論集』第3号, pp.33-39。
- 原口美貴子(1994):「群馬県児童・生徒の郷土認識における上毛かるたの意義」(卒論要旨),『群馬大学社会科教育論集』第3号, pp.51-55。
- 原口美貴子・山口幸男(1994):「郷土かるた遊びと郷土認識の形成一群馬県の上毛かるたの場合一」,『群馬大学教育実践研究』第11号, pp.1-44。
- 原口美貴子(1994):「『郷土かるたづくり』の工夫点はどこか一郷土かるたの活用と製作一」,『社会科教育』395号, pp.63-65。
- 山口幸男・原口美貴子(1995):「郷土かるた遊びと児童・生徒の郷土認識への影響一群馬県の上毛かるたの場合一」,社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』,清水書院, pp.291-302。
- 3) かるたの歴史をまとめるにあたっては以下の文献を参考とした。
- 森田誠吾(1970):『昔いろはかるた全』,求龍堂。
- 〃    (1974):「京の夢・江戸の夢」,別冊太陽『いろはかるた』,平凡社。
- 山口格太郎(1974):「日本のかかるたの流れ」,別冊太陽『いろはかるた』,平凡社。
- 戸板康二(1974):「いろはかるたの楽しみ」,別冊太陽『いろはかるた』,平凡社。
- 〃    (1981):『いろはかるた』,寝々堂。
- 鈴木栄三(1973):『今昔いろはカルタ』,錦正社。
- 半澤敏郎(1980):『童遊文化史』第2巻,東京書籍。
- 4) 上掲3)戸板康二(1981)。
- 5) 前掲3)半澤敏郎(1980)。
- 6) 海後宗臣他編(1932):『我国に於ける郷土教育と其の施設』,目黒書房。
- 7) 峰地光重著作集刊行会編(1981):『峰地光重著作集』第7巻,けやき書房。
- 8) 峰地光重著作集刊行会編(1981):『峰地光重著作集』第8巻,けやき書房。
- 9) 前掲6)海後宗臣他編(1932)。
- 10) 北橋村教育委員会(1985):『橘陰郷土読本=郷土かるた解説=』,全85頁。
- 11) 重要文化財旧開智学校管理事務所(1990):『展示解説図録』,全96頁。
- 12) 前掲3)戸板康二(1981)。
- 13) 「郷土意識」,平凡社百科事典第4巻, pp.348-349。
- 14) 文部省(1982):『小学校教育課程一般指導資料』。
- 15) 文部省(1987):『小学校郷土を愛する心を育てる指導』。
- 16) 群馬県図書館協会編(1988.3):「群馬のふるさとかるた集」,みやま文庫,全342頁。
- 17) 生涯学習の構想・始まりについては以下の文献を参考とした。
- ポール・ラングラン著,波多野完治訳(1990.4):『生涯教育入門第一部』,全日本社会教育連合会。
- ポール・ラングラン著,波多野完治訳(1989.7):『生涯教育入門第二部』,全日本社会教育連合会。
- 亀井浩明・児島邦宏(1989):『地域と結ぶ学校』,教育出版。
- 山口富造編(1988):『学ぶ・考える一社会教育を学ぶ人のために』,学文社。
- 18) 群馬文化協会(1987.2):『上毛かるた40年の歩み』,全51頁。
- 19) 群馬県子ども会育成団体連絡協議会(1992.11):『ぐんまの子ども一県子連30年の歩み一』,全165頁。
- 20) 現在群馬県で「上毛かるた廻り」を行っている子ども会としては,黒保根村子供会と白沢村平井出地区子供会がある。その詳細については前掲2)原口美貴子・山口幸男(1994)を参照いただきたい。
- 21) 群馬県企画部統計情報課(1994):『統計でみる上毛かるた』,群馬県。
- 22) 別所やそじ編(1979):『堺かるたの本』,堺かるた普及会。